

リアリティ reality

リアリティ reality。日本語では現実性とか、現実味、真実らしさなどと訳される。

練習は本番のシミュレーションとして重要な意味を持つ。そして、そのシミュレーションを行う際のメンタリティが、本番に近いものであるか、あるいは本番とはまるっきり違うものであるか、その本番らしさの度合いがリアリティである。だから、チームメイトを相手にストロークを楽しもうというなら、来年の5月に支部大会を戦うための準備としては、体力作り以上の何の効果も期待できないのだ。顧問に怒鳴られるのは不快なことだから、足だって動すし、声も出さかもしれないが、そこには何のリアリティもない。

校内での試合。目一杯の1stサーブをフォルトにして、やたら慎重な2ndサーブに総てをかける。そりゃ何回かに1回は入るだろうし、エースは気持ちがいいに違いない。しかし、たかだか校内の試合という意識では、エースの代償として支払ったたくさんのフォルトが痛くも痒くもないのだ。リアリティとは、校内の試合においても、決勝戦のマッチポイントで犯すフォルトと同じ痛みを感じることである。

リアリティのある練習をしている者は、本番の試合で持っている力を最大限に発揮できるに違いない。だって、彼のメンタリティにとっては、本番も日常の練習も変わらないのだから。そして、日常の練習が彼のメンタリティを十分に鍛えてくれているはずだから。一方で、その場その場の“気持ちいい”を優先し、リアリティのない練習を続ける者は、本番ではほとんど頼りにならない。メンタリティが日常の練習によって鍛えられていないばかりか、彼にとっては本番のすべてが日常の練習とはかけ離れた現実なのだから。

戦争のニュースが報じられない日はない。悲惨な戦争はどうして無くならないのだろう。政治的な問題について述べようというのではない。しかし、例えば「〇〇で自爆テロがあり、20人の一般市民が命を落とした」「〇〇への空爆で、子供5人を含む10人が犠牲になった」などというニュースを聞いて、何を思うだろう。

戦争のニュースに接した時に、その犠牲者がもしも自分の親友だったら、恋人だったら、両親だったら、我が子だったら（だって、それら現実の犠牲者たちには、身を震わせ、涙を流して悲しんだ恋人や夫や妻、息子や娘、両親や親友が必ずいるのだから）……そんな悲惨な出来事が自分の現実で起こったらどうだろう想像するときの「現実味」の度合いがリアリティである。だから豊かなリアリティを持つ心は、何よりも戦争を憎むのだ。一方、リアリティに^{とぼ}乏しい心は、いたましい戦争の歴史や、世界で起こっている悲惨な現実を、自分や自分の愛する人の命とは全然関係ないどこか遠くの世界の出来事としか受け止めることができない。亡くなった人の数に対して「それは大変なことだ」と心を痛める程度が関の山なのである。

偉い政治家の政策や駆け引きが世界に平和をもたらすわけではないのだ。（私やお前たちを含めた）世界中の人々が、戦争を憎み、平和を愛して、命の大切さを思うイメージーションの豊かなリアリティが、この世から戦争を無くするのである。

リアリティに乏しいという愚かさは、罪悪でさえあるのだ。